

# 特集 環境教育・環境学習 — 関係性を知って変心しよう

岡田真美子



岡田真美子(あかだ・まみこ)  
1954年生まれ。兵庫県立大学環境  
人間学部教授。環境学・感性  
教育、地域教育。近刊『いのち  
の倫理学』(コロナ社)『感性育  
学』(東信堂)『環境余録2004春  
号』(市民会議)いずれも共著。



図1 坂城小学校の生島池  
(写真提供:坂城小学校 西山由樹先生)

成の伝統文化や空間の歴史という視点を取  
り入れることが考えられる。  
次に地域の歴史的なタカラと結びつけた  
環境学習例をあげよう。  
赤穂市東瀬河に浮かぶ、生島は樹林を伐  
採することなく現代まで至っており、国の  
天然記念物に指定されている。この樹林を  
守ってきたのは島に大層神社(神楽河  
勝)の存在である。坂城小学校では、六年生に  
なると、生  
島まで坂  
城の海岸  
から遊泳を  
行ってきた  
(図1)遊  
泳は明治時  
代に始ま  
り、遊泳が  
盛んになっ

た。ここ中断したが、地域の強い希  
望で二十五年前後復活した。爾来こ  
の行事を支えているのが地域の先  
達、水泳少年団の指導者や、坂城  
漁業組合の人々である。この遊泳  
は地域と学校を結ぶ大切な働きを  
している。またこの遊泳は、歴史、  
伝統、生態系保護などを結ぶすば  
らしい環境教育学習である。



図2 相生市体験型環境学習 ビーチクリーニング  
(8月7日、写真提供:松下剛士氏)

(1)子供たちは地域のタカラ「生  
島」に向かって泳ぐ、美しい  
生島は美しい遊泳の到達点で  
あり、目指すべき目標として  
意識される。  
(2)大人たちに海の環境が強く意  
識される。子供たちが泳ぐ海  
だから美しく保たなければい  
けないと思える。  
このような地域のタカラを中心として地  
域の人的ネットワークを結ぶ環境教育・  
学習が、さまざまな地域で行われたい  
と思う。

## 美しい兵庫づくりのために — 環境問題は関係性の問題

今年、兵庫県環境政策課を中心として、  
県庁本部、二十課、県教育委員会が構成さ  
れる環境教育学習推進協議会が立ち上  
り、調査の結果、十県民ヒューご環境  
創造協議会、エックスセンターなどをあ  
わせると関係網だけで二百を超える関連事

業があることが明らかになった(図2は、  
環境省の委託を受けて、相生市NPO漁  
協・県立大学環境人間学部などの協働によ  
って進められている体験型海  
の環境学習(連絡協議会委員長  
・熊谷哲兵衛県立大学教授)の  
様子)。



ひょうご環境学習プログラム  
(2003年3月、委員長:谷口文彦甲南大学教授)  
http://www.pref.hyogo.jp/JFN/apr/hakusho/  
kankyogoprogram/gakusyupromokuji.htm

## 心の中に変化を起こす — 環境学習の目標

「日大学の新学舎のまわりの町筋道路  
の両側は、すべてこれゴミの吹き溜まり  
なのである。(中略)それがいつまでも  
減らないとゴミを見ると、どうやらこ  
この住民はゴミとの共存をきめこんで  
いるらしい。(中略)清掃ボランティアの  
で、そのうちとうとう我慢できず、火  
焚みやポリ袋を持ち出して拾い集めるこ  
ととなった(中略)汚れがひどく長かつた  
だけに、清掃隊のすがすがしきはひと  
の異変のように強烈であった。しかし次  
の週には元の木阿弥(中略)と相成った  
が、今度は事務職員を先頭に運動部の学  
生たちも加わって清掃奉仕が始まった。  
また汚され、また掃除する。一月ほど  
の間回数繰り返されたらうか。ここ  
で町に異変が起こった。町からゴミの散  
乱がなくなったのである(中略)おそく  
町の住民もゴミを拾い出したのであらう  
(中略)町の人の心の中に、ひとつの変化  
が起こったのである」

だ。頭の中でわかっただけではなく、腕に  
落ちて心変わりすると、行いも変わる。こ  
れが、心変わりする。心の中に変化が起ること  
—これがすなわち環境教育・学習の本当の  
意味であると思う。  
筆者長尾は磯野の空き街公舎に竹箒で  
立ち向かいカンカン坊主と呼ばれた人であ  
る。このような環境に密着した環境活動の  
積み重ねがあつて環境基本法や環境基本計  
画が成立し、今日の環境教育・環境学習が  
あることをまず述べておきたい。

## 環境教育・学習の 「四葉のクローバー」

一九九九年の暮れ、中央環境審議会が、「こ  
れからの環境教育・環境学習」持続可能な  
社会をめざして」という答申を出した。  
これが後の環境教育・環境学習の推進方策  
の基本的なあり方を決めるものとなった。  
その中で特に大切に思われるのが次の四  
点である。

- 1 総合性 2 目的の明確化
- 3 体験重視 4 地域重視

教育・学習というときに学校などの教  
育機関を思い浮かべがちな環境教育・  
学習の現場としては、他、地域、家庭、  
職場、野外活動の場など多様な場が考えら  
れる。これらの連携を図りながら、総合的に  
推進してゆこうというのが、総合性である。  
環境教育・学習を行うときにはよく目に  
指しているビジョンを明確にする必要があ

る。これが第2である。

またデスクワークのみの教育・学習では  
頭の中で理解に終わってしまう。心の中  
に変化を起こすためには、「自然体験」生  
活体験の積み重ねが重要である。環境教  
育・学習に「体験型」ということが冠され  
るのはそのためである。  
以上の三つとも増して重要なものは第4の  
「地域重視」である。環境はもとよりによつて  
異なる。各々のローカリティが重視されな  
ければならない。そのため環境教育・環境  
学習は、地域に根ざし、地域から広がるも  
のであることが求められるのである

## 地域と教育現場との 連携がポイント

私事で恐縮だが、うちには十六歳の息子  
がいる。この子が小学生だったときから小  
思議だったことに、「ゆりの教育」を譲  
りだして以後、子供たちも先生たちもなぜか  
それ以前よりずっと忙しくなっているの  
である。環境学習をいっしょにやりますよ  
と地域から声掛けしても、学校現場は自ら  
の子定消化で精一杯というものが少なく  
ない。学校での環境教育、環境学習の成功  
の鍵は、いっしょに地域と協働できるかにかか  
っているといっても過言ではないだろう。

## 地域のタカラを結ぶ

地域重視のもうひとつの内容として、地

「パートナーシップにあたっての注意」  
としてこう記されている。「自治体・市民  
企業の構成員や目的は本来それぞれ違っ  
たことを認識して(中略)相手の主体性をこ  
とまで尊重でき、自らの利害に拘束され  
ないものがあり、「痛み分け」や「すり  
あい」が欠かせない。思案、準備、労苦を共  
にし、協働し、信頼を築くこと。差異を  
超えて共通の目標を作る(後略)環境パー  
トナーシップづくりは、地域の連携を考  
えるとき、改めて喚起されるべきことば  
である。

環境について教える、学ぶというこ  
は、さまざまな関係性を知ることには難  
しい。自分一人の力で生きているのは  
ないということ、自分の行いは必ず影  
響を及ぼすということ、身にしみて感  
じて心に変化を起こす。そんな環境教育・  
環境学習によって美しい兵庫づくりが実現  
することを念願してやまない。